

カルシウム主薬製剤

製品群No. 44

ワークシートNo.27

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果							
評価の視点	薬理作用	相互作用 併用禁忌(他 剤との併用 により重大な 問題が発生す るおそれ)	併用注意	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意す べき副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化 等に伴う使用 環境の変化	用法用量	効能効果				
				薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの						使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ					
カルシウム 補給成分	なし																	
クエン酸カルシウム																		
グルコン酸カルシウム	カルチコール末	抗タニール作用、低カルシウム血症改善作用	リン酸エストラムステナトリウム(リン酸エストラムステナトリウムの効果が減弱)	強心配糖体(強心配糖体の作用を増強)、テトラサイクリン系抗菌剤・ニューキノロン系抗菌剤・エチドロン酸ナトリウム(これらの薬剤の効果が減弱)、非脱分極性筋弛緩剤(これらの薬剤の筋弛緩作用が減弱)	高カルシウム血症・結石症(頻度不明)	頻度不明(食欲不振、悪心・嘔吐、便秘、胃痛、けん怠感)		高カルシウム血症、腎結石(腎結石を助長)、重篤な腎不全(組織への石灰沈着を助長)、リン酸エストラムステナトリウムを投与中(リン酸エストラムステナトリウムの効果が減弱)		活性型ビタミンD製剤を服用、強心配糖体の投与を受けている、高カルシウム血症があらわれやすい病態の患者、高齢者			高カルシウム血症となる可能性がある。食慾不振、悪心・嘔吐、便秘、筋力低下、多飲多尿、精神症状等があらわれ、さらに重篤になると不整脈、意識障害が出現する。高齢者では高カルシウム血症が起こりやすい。		長期投与により高カルシウム血症・結石症が現れることがある。	高カルシウム血症があらわれやすいので、用量に留意すること。高齢者では腎機能が低下していることが多く、高カルシウム血症があらわれやすいので用量に留意すること。高齢者では用量に留意。	グルコン酸カルシウムとして、通常成人1日1～5gを3回に分けて経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。高カルシウム血症があらわれやすいので用量に留意すること。高齢者では用量に留意。	低カルシウム血症に起因する下記症状の改善 テタニール、テタニール関連症状 小児脂肪便におけるカルシウム補給
炭酸カルシウム	炭カル錠「ヨシダ」	沈降炭酸カルシウムは不溶性カルシウム製剤の1種で、制酸作用を呈し、また吸着作用もあらわすので胃潰瘍及び胃酸過多症に制酸薬として用いる	テトラサイクリン系抗菌剤・ニューキノロン系抗菌剤・エチドロン酸ナトリウム・鉄剤(これらの薬剤の吸収を阻害し、効果を減弱)、高カリウム血症改善イオン交換樹脂製剤(これらの作用を減弱)、活性型ビタミンD製剤(高カルシウム血症があらわれる)、大量の牛乳(milk-alkali syndromeがあらわれる)、ジギタリス製剤(ジギタリス製剤の作用を増強)	頻度不明(高カルシウム血症、アルカローシス等の電解質失調、悪心・嘔吐、便秘、下痢、胃酸の反動性分泌等)、頻度不明(長期・大量投与で腎結石、尿路結石)	頻度不明(過敏症)			甲状腺機能低下症又は副甲状腺機能亢進症(病態に悪影響)		腎障害、心機能障害、肺機能障害、便秘、高カルシウム血症、高齢者			長期・大量投与で腎結石、尿路結石		沈降炭酸カルシウムとして、通常成人1日1～3gを3～4回に分けて経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。高齢者で減量。	下記疾患における制酸作用と症状の改善 胃・十二指腸潰瘍、胃炎(急・慢性胃炎を含む)、上部消化管機能異常(神経性食思不振、いわゆる胃下垂症、胃酸過多症を含む)		
乳酸カルシウム	乳酸カルシウム<純正>	カルシウム不足による疲労、横紋筋溶解症に対し、鎮静、痙攣軽減作用。栄養補給。	テトラサイクリン系抗菌剤(併用薬剤の吸収阻害)		頻度不明(便秘、長期投与・高カルシウム血症、結石症)			高カルシウム血症(症状悪化)、腎結石(症状悪化)、重篤な腎不全(組織への石灰沈着の助長)		活性型ビタミンD製剤服用中、強心配糖体服用中、高カルシウム血症のあらわれやすい病態、高齢者			長期投与により、血中、尿中カルシウムが高値になることがある。高カルシウム血症、結石症		1回1g、1日2～5回、適宜増減。高齢者は減量	低カルシウム血症に起因する下記症状の改善 テタニール、下代代謝性骨疾患におけるカルシウム補給 妊婦・産婦の骨軟化症、発育期におけるカルシウム補給		

カルシウム主薬製剤

製品群No. 44

ワークシートNo.27

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 薬用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果					
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果			
		併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの			使用量に上 適量使用・誤使用のおそれ	長期投与による健康被害のおそれ					
	無水リン酸水素カルシウム	リン酸水素カルシウム<純正>を使用	妊娠、授乳、骨カルシウム沈着減少時などカルシウムとリン酸塩の要求が増すときに、カルシウムとリン酸塩の補給源として用いられる。	テトラサイクリン系抗生物質(併用薬剤の吸収阻害)		頻度不明(長期投与・高カルシウム血症、結石症)		高カルシウム血症(症状悪化)、腎結石(症状悪化)、重篤な腎不全(組織への石灰沈着の助長)	活性型ビタミンD製剤服用中、強心配糖体服用中、高カルシウム血症のあり、高齢者			長期投与により、血中、尿中カルシウムが高値になることがある。高カルシウム血症、結石症	1日3g、3回分服、適直増減。高齢者は減量			
その他成分	アミノ酸エチルスルホン酸(タウリン)	タウリン散「大正」	胆汁酸排泄促進作用を有する。 ・実験的肝障害に及ぼす影響を有し、AI-P、γ-Gロブリン、BSP、血清コレステロール/血清コレステロール比を改善させた。また、肝細胞の再生を促進して組織像を改善させた。さらに慢性障害群においては間質の結合組織増殖を抑制した。胆汁分泌などの肝細胞機能維持に働いた。 ・心防代謝改善作用、心防保護作用 ・実験的慢性心不全による死亡率低下			0.5%未満(嘔気、下痢、腹部不快感、便秘、食欲不振)	0.5%未満(過敏症)						高齢者		アミノエチルスルホン酸として、成人1回1gを1日3回食後に経口投与する。なお、うつ血性心不全に用いる場合、本剤は強心利尿剤で十分な効果が認められないときに、それと併用すること。高齢者で減量。	高ビリルビン血症(閉塞性黄疸を除く)における肝機能の改善 うつ血性心不全
	塩酸リジン	なし														
	炭酸マグネシウム	「純生」炭酸マグネシウム	制酸作用効力は酸化マグネシウムの約1/2。瀉下作用硫酸マグネシウムに劣る。非吸収性であり、アルカリローシスを生じない。	テトラサイクリン系抗生物質・ニューキノロン系抗菌剤・エチドロン酸二ナトリウム・セフジニル(これらの薬剤の効果が減弱)。他の併用薬剤(併用薬剤の吸収・排泄に影響)。大量の牛乳・カルシウム製剤[milk-alkali syndrome(高カルシウム血症・高窒素血症・アルカローシス等)]		頻度不明(高マグネシウム血症・下痢)		腎障害、心機能障害、高マグネシウム血症、下痢、高齢者			長期大量投与で高マグネシウム血症		1.1日2gを数回に分割経口投与。高齢者では減量2.1日3~8gを頓用又は数回に分割経口投与。高齢者では減量。	1.胃・十二指腸潰瘍、胃炎(急・慢性胃炎、薬剤性胃炎を含む)、上部消化管機能異常(神経性食思不振、いわゆる胃下垂、胃酸過多症)における制酸作用と症状の改善 2.便秘症		

カルシウム主薬製剤

製品群No. 44

ワークシートNo.27

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果			
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化	用法用量	効能効果	
		併用禁忌(他 剤との併用 により重大な 問題が発生す るおそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの			使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ		
ビタミンD3	ワンアルファ錠0.25/ワンアルファ錠0.5/ワンアルファ錠1.0	本剤は、1α,25-(OH)D ₃ となり、腸管および骨等の標的組織に分布するレセプターに結合し腸管からのCa ₂₊ 吸収促進作用、骨塩溶解作用および骨形成作用等一連の生理活性を発現する。腸管からのCa ₂₊ 吸収ならびに血清Ca ₂₊ 上昇作用を有する。	マグネシウムを含有する製剤(高マグネシウム血症を発生)、ジギタリス製剤(不整脈があらわれる)、カルシウム製剤・ビタミンD及びその誘導体(高カルシウム血症を発生)	急性腎不全(頻度不明)、肝機能障害、貧血(頻度不明)		0.1~5%未満(食欲不振、悪心・嘔気、下痢、便秘、胃痛、AST(GOT)、ALT(GPT)の上昇、BUN、クレアチニンの上昇(腎機能の低下)、そう痒感、結膜充血)、0.1%未満(嘔吐、腹部膨満感、胃部不快感、消化不良、口内異和感、口渇等、頭痛・頭重、不眠・いらいら感、脱力・倦怠感、めまい、しびれ感、眠気、記憶力・記銘力の減退、耳鳴り、老人性難聴、背部痛、肩こり、下肢のつっぱり感、胸痛等、軽度の血圧上昇、動悸、LDH、γ-GTPの上昇、腎結石、発疹、熱感、関節周囲の石灰化(骨形成)、嘔声、浮腫)		小児、高齢者、妊婦又は妊娠している可能性のある婦人、授乳婦、高リン酸血症の患者	高リン血症の患者ではリン酸結合剤を併用し、血清リン値を下げる。		過量投与を防止するため、本剤投与中、血清カルシウム値の定期的測定を行い、血清カルシウム値が正常値を超えないよう投与量を調整すること。		本剤は、患者の血清カルシウム濃度の十分な管理のもとに、投与量を調整する。 慢性腎不全、骨粗鬆症の場合 通常、成人1日1回アルファカルシドールとして0.5~1.0μgを経口投与する。ただし、年齢、症状により適宜増減する。 副甲状腺機能低下症、その他のビタミンD代謝異常に伴う疾患の場合 通常、成人1日1回アルファカルシドールとして1.0~4.0μgを経口投与する。ただし、疾患、年齢、症状、病型により適宜増減する。 小児用量 通常、小児に対しては骨粗鬆症の場合には1日1回アルファカルシドールとして0.01~0.03μg/kgを、その他の疾患の場合には1日1回アルファカルシドールとして0.05~0.1μg/kgを、経口投与する。ただし、疾患、症状により適宜増減する。 高齢者では生理機能が低下しているので用量に注意。小児には少量から開始し、漸増。	下記の疾患におけるビタミンD代謝異常に伴う諸症状(低カルシウム血症、テタニー、骨痛、骨病変等)の改善 慢性腎不全、副甲状腺機能低下症、ビタミンD抵抗性骨病、骨軟化症・骨粗鬆症

タンパク・アミノ酸製剤

製品群No. 45

ワークシートNo.28

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)		H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果	
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		濫用に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別 に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)		スイッチ化等に伴う使用環境の変化			
			併用禁忌(他剤との併用に より重大な問題 が発生する おそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの						使用量に上 限があるもの	適量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被害 のおそれ			
ビ タ ミ ン C	ビタミンC(ア スコルビン 酸)	アスコルビン 酸「ヨシダ」					頻度不明(悪 心・嘔吐・下 痢等)				高齢者					下痢疾患の うち、ビタミン Cの欠乏又は 代謝障害が関 与すると推定 される場合 (毛細管出血 (鼻出血、歯 肉出血、血尿 など)、薬物 中毒、副腎 皮質機能障害 、骨折時の 骨基質形成・ 骨癒合促進、 肝斑・雀卵 斑・炎症後の 色素沈着、光 線過敏性皮膚 炎)には効果 がないのに 月余にわた って漫然と 使用すべき でない。	通常成人1日50~2,000m gを1~数回に分けて経口 投与する。 なお、年齢、症状により適 宜増減する。高齢者で減 量。	1. ビタミンC欠 乏症の予防お よび治療(壊血 病、メルレル・ パロー病)、ビ タミンCの需要 が増大し、食 事からの摂取 が不十分な際 の補給(消耗 性疾患、妊産 婦、授乳婦、は げしい肉体労 働時など)。 2. 下痢疾患の うち、ビタミン Cの欠乏又は代 謝障害が関与 すると推定され る場合。 毛細管出血 (鼻出血、歯肉 出血、血尿な ど)、薬物中 毒、副腎皮質 機能障害、骨 折時の骨基質 形成・骨癒合 促進、肝斑・雀 卵斑・炎症後 の色素沈着、 光線過敏性皮 膚炎。 なお、2の効 能・効果に対 して、効果が ないのに月余 にわたって漫 然と使用すべ きでない。	

タンパク・アミノ酸製剤

製品群No. 45

ワークシートNo.28

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化等に伴う使用環境の変化		
			併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの					使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ			
アミノ酸成分	レシステイン	ハイチオール錠80					0.1~5%未満(悪心)、0.1%未満(下痢、口渇、軽度の腹痛)			高齢者				放射線障害による白血球減少症の場合は、通常、放射線照射1時間前より投与を開始すること。			1.通常成人下記1回量を1日2~3回経口投与する。なお、年齢・症状により適宜増減する。 レシステインとして1回80mg ハイチオール錠40 2錠、ハイチオール錠80 1錠、ハイチオール散32% 250mg 2.通常成人下記1回量を1日3回経口投与する。なお、年齢・症状により適宜増減する。 レシステインとして1回160mg ハイチオール錠40 4錠、ハイチオール錠80 2錠、ハイチオール散32% 500mg ・高齢者で減量。	1.湿疹、尋常性乾癬、薬疹、中毒性多形性皮膚炎、多形性紅斑 2.放射線障害による白血球減少症
	パントテン酸カルシウム	パンカル散					0.1%未満(大量投与で腹痛、下痢等)						腹痛・下痢等(大量投与)	パントテン酸の欠乏または代謝障害が関与すると推定される疾患(ストレプトマイシンおよびカナマイシンによる副作用の予防および治療、接触皮膚炎、急・慢性湿疹、弛緩性便秘)に対して、効果が無いのに月余にわたって漫然と使用すべきでない		通常、成人にはパントテン酸カルシウムとして1日10~200mg(0.1~2.0g)を1~3回に分けて経口投与する。なお、年齢・症状により適宜増減する。	1.パントテン酸欠乏症の予防および治療、パントテン酸の需要が増大し、食事からの摂取が不十分の際の補給(消耗性疾患、甲状腺機能亢進症、妊産婦、授乳婦など) 2.下記疾患のうち、パントテン酸の欠乏または代謝障害が関与すると推定される場合。ストレプトマイシンおよびカナマイシンによる副作用の予防および治療、接触皮膚炎、急・慢性湿疹、弛緩性便秘	